

広報もがみは、町の今を記録し、未来へつなぐタイムカプセル

あの日のもがみへ

— 広報でたどる、まちの歩み —

シリーズ
3

あの日の友は、今。



昭和63年8月号表紙

姉妹都市に込められた未来への願い

昭和59年12月、最上町と岩手県三陸町（現・大船渡市）は姉妹都市盟約を締結しました。昭和60年1月号の広報には、教育や文化、スポーツ、産業など、さまざまな分野で交流を深めながら、互いを理解し、友情を育んでいきたいという両町の願いが記されています。

締結から間もない昭和60年2月号には、「まず青少年の交流に力点を」と題した寄稿が掲載されました。寄稿した樋口義夫さんは、未来を担う子どもたちが、学校やスポーツなどを通じて交流を重ねることが、姉妹都市としての大きな財産となり、将来の友情や相互理解につながると提言しました。

この寄稿と児童交流を結び付けることはできませんが、未来を担う子どもたちへの願いは、その後の交流の中で少しずつ形になっていったのではないのでしょうか。

子どもたちが育んだ「交流」という財産

その年の夏、両町では第1回児童交流が始まりました。最上町の子どもたちは三陸町を訪れ、広い海や漁港の風景に触れ、三陸町の子もたちは最上町を訪れ、前森高原などで自然を満喫しました。互いの町を訪ね、それぞれの暮らしや文化に触れることは、子どもたちにとって忘れられない夏になったことでしょう。

その後、交流はさらに工夫されます。最上町の子どもたちは夏に三陸町を訪れ、三陸町の子もたちは雪深い2月頃に最上町を訪れる形へと変わりました。海の子もたちは雪国の暮らしを体験し、山の子もたちは夏の海を知る。それぞれの町ならではの魅力を体感できる交流へと発展していったのです。



平成元年8月号掲載写真、手作りの名刺を交換している様子。

形は変わっても、つながりは続いている

平成13年、三陸町は市町村合併により大船渡市となり、児童交流はその役目を終えました。しかし、姉妹都市として育まれた絆まで途切れたわけではありません。平成23年の東日本大震災では支援を行い、令和7年の大規模山林火災では、最上町の職員らが現地で炊き出しを行うなど、困難な時には互いに支え合う関係が今も続いています。

あの夏、三陸町で出会った友達は、今どこで暮らしているのでしょうか。あの日一緒に笑い合った子どもたちは、その後の大きな災害をどう乗り越え、どんな人生を歩んできたのでしょうか。

次回シリーズ4は10月号で掲載します。お楽しみに！

地域おこし協力隊通信

活動がわかる
SNS



協力隊として迎える最後の夏



こんにちは！
今月号は川原田がお伝えします！

通勤途中に広がる田畑もすっかり青々とし、夏の訪れを感じる季節となりました。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

この夏は、私にとって、地域おこし協力隊として過ごす最後の夏になります。町内では前森高原サマーフェスティバルや最上祭りなど、さまざまなイベントが開催される時期を迎えています。私にとっても、協力隊として関われる最後の機会です。

6月6日に開催された「道の駅もがみあつた感謝祭」では、イベントスタッフとして参加しました。協力隊として最上町に来るまでは、このような立場でイベントに携わる機会とはとなく、とても貴重な経験となりました。

今年もスタッフとして、そして観光情報を発信する立場として、最上町の魅力やイベントの楽しさを多くの方に伝え、最後の夏を皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思っています。

モルックでつながる 富沢地区

4月から集落支援員として富沢地区公民館にデスクを置き、富沢・赤倉地区を担当しています。恥ずかしながら土地勘がありませんが、地図を片手に区長や公民館長のお宅を訪ねたり、各サロンや集落の行事に顔を出したりしながら、皆さんの名前と顔を覚える「脳トレ」の毎日です。少しずつ地域のがんが分かれるようになり、ようやく慣れてきたところです。

7月23日、旧赤倉小学校体育館で、富沢地域間連携推進協議会の事業「富沢地区サロン会モルック交流会」が開催されました。富沢地区のサロン参加者が一堂に会して交流を深めるこの催しは、コロナ禍後の令和5年に始まり、今年で4回目を迎えます。今年は、サロン活動が再開した万騎の原を含む過去最多の7グループ54人が参加しました。



参加者は50点ちょうどを目指してモルックの腕前を競い合い、ナイススローが決まるたびに敵味方なく大きな拍手と歓声を送られ、4ゲームを楽しみました。あいにくの猛暑のため、参加者全員での昼食交流会は中止となりましたが、笑顔あふれる交流を通して親睦を深める貴重な機会となりました。



富沢・赤倉地区集落支援員
大場 喜一